

■九州朝日放送番組審議会議事概要（1月分）

第599回	九州朝日放送番組審議会 議事概要
開催年月日	平成30年1月16日（火） 午後4時00分～5時30分
開催場所	九州朝日放送 本社役員会議室
出席者	委員総数 8名 出席委員数 6名  <b>（出席委員）</b> 古宮 洋二 委員長 戸田 康一郎 委員 守田 有理子 委員 鶴 利絵 委員 池田 勝 委員 安恒 万記 委員  <b>（放送事業者側出席者名）</b> 代表取締役社長 和氣 靖 常務取締役 二木 清彦 取締役編成制作局長 清水 透 ラジオ局長 園田 哲也 報道局長 臼井 賢一郎 編成制作局テレビ制作部 部長 松尾 恵美 編成制作局テレビ制作部 野村 友弘 編成制作局テレビ制作部 姫野 詠美  番審事務局長兼視聴者・広報室長 奥園 徹 番組審議会事務局員（ラジオ編成業務部） 原 由美子 番組審議会事務局員（視聴者・広報室） 松永 俊郎
議 題	議 題<テレビ番組> テレメンタリー2017「お弁当レター 娘へのエール」 放送日：2017年10月1日（日）午前5時50～6時20分  報告事項 1. 深夜番組「ドオーモ」の企画に対する苦情について 2. 平成30年1・2月 ラジオ・テレビ番組編成状況 3. 平成29年11月・12月 視聴者・聴取者応答状況 4. 次回 平成30年2月度（第600回）審議会日程 2月19日（月）午後3時30分～開催 <課 題> ラジオ番組「夕方じゃんじゃん」（月～金 午後4：00～6：45生放送） ※審議は2017年12月12日（火）放送分にて 5. その他
議事の概要	◎委員の意見（概要）  委員からは、 ○最初はタイトルからお弁当を介した微笑ましい親子関係を描く感動ドキュメンタリーかと想像していたが、シングルマザーとADHD（注意欠如・多動症）の娘の葛藤を描いた考えさせられる内容だった。 ○この番組は問題が解決して終える形で完結するのではなく、空手に打ち込みながらもまだ道半ばで少しずつ前進し続けている娘の様子で締めくくられており、違和感なく受け入れることができた。そうしたところがこの番組の真実味や共感につながったと思う。 ○長期間にわたる取材の中で家族のプライベートにかかわる部分も丁寧に記録しており、母娘との間にしっかりと信頼関係が築かれていることが画面を通じて伝わった。 ○フィリピンのフリースクールで空手に打ち込む娘が、番組の最後の部分で「過去の自分が恥ずかしい」と話したところは、母娘が物理的に離れてしまったものの、心の距離は取り戻しつつあるのだと安心させられた。非常に心打たれる内容で感動した。 ○ADHDをはじめ様々な症状や特徴を十分に理解し、今後、同様な病気を持つ方々の社会進出がうまく進み自信を持って生活できる環境にすべく、国や自治体、企業、個人がそれぞれの立場で真剣に取り組んでいかなければならない課題だと考えさせられた。  などの評価を頂きました。  また、気になる点や望むこととして、 ○番組タイトルからは「今日も嫌がらせ弁当」という本の二番煎じ的な内容かと思った。番組の冒頭でお弁当だけではない、母娘の葛藤など番組の本質的な問題提示をするなどの工夫が欲しかった。 ○番組は約3年の取材活動を30分にまとめたもので内容を十分に収めきれておらず、また当初予定していたものとは違う展開になったためか、全体を通して見た時にストーリーに唐突感を感じる部分があった。途中で母娘のやり取りが困難になる部分では、丁寧に欠けていたように感じた。なぜ娘がフィリピンのフリースクールを選んだのかも疑問が残った。 ○母娘が自らの状況をどん底だと感じる気持ちは理解できるものの、底辺という言葉のニュアンスに違和感を抱いた。自分たちが社会の底辺と思わせてしまう社会の怖さ、やり直しのきかなさ、閉塞感にもう少し焦点を当てても良かったのではないかと。底辺と言う言葉だけが走ってしまっていた印象を受けたのが残念だった。 ○ADHDについては、当事者にとって周囲からの偏見を招く可能性を含む微妙な問題だけに、やや情報量が中途半端であるように思えた。  などの批評や提言を頂きました。  これらに対して、担当者から、 ○取材を始めた当初は「アサデス。KBC」の企画のひとつで、当時「今日も嫌がらせ弁当」という本が話題になっていたため、地元福岡にも同様にメッセージ弁当を作っている人を紹介したのがきっかけだった。取材開始当初はほのぼのとした企画内容のもりで、このような展開になることは想像していなかった。 ○当初、サブタイトルを「ADHDの娘へのメッセージ」としていたが、娘のADHDをカミングアウトすることに関し、非常にナイーブな問題なのでお母さんは随分と悩んでおられた。話し合いを重ね、タイトルが独り歩きする懸念も否めないことから、急きょタイトルを変更することにした。 ○（担当ディレクターは）途中で取材ができない時期もあったが、一人の「姉」として心配し、今後も何か役に立てたらと思い、娘さんと連絡を取り、取材を続けていた。いつの日か娘さんが母親の立場になって自分の子どもに弁当を作る日が来るまで取材を続けたいと思っている。  などの説明をしました。